

深井信太郎日記・大正9年2月5日

～百年前の生活をイメージする～

深井 直

はじめに

今を遡ること約百年、ある冬の一日を祖父、深井信太郎（大正9年当時35歳）が綴った日記からイメージしてみた。それは、父、弘泰（平成26年没）の産まれた日でもある。

深井信太郎は、明治18年に現在の埼玉県に生まれ、福島県、秋田県の中学校教師を務め、大正4年（1915）に檜垣農場の二代目として監理人に来村。以来、長く地域の農業振興を実践した。

深井信太郎日記は、信太郎が上幌別（のちの歌登）に来村してから書き綴ったものであり、大正6年（1917）から昭和46年（1971）までのうち、18冊が枝幸町の博物館施設「オホーツクミュージアムえさし」に文書資料として収蔵、保管されている（資料番号 OME09-0049）。一年ごとの当用日記に日々のできごとが綴られたものである。

元来、日記は極めて私的なものであり、公開されることを想定していない。信太郎の日記も、備忘録的な性格を持たせて書かれたもので、日々起きたことの記録が淡々と綴られているに過ぎない。しかしその内容は、天候・気温、生活記録の他、本業の農事記録、開拓記録、公的役務、地区の行事・出来事、各種寄附金、各種役職の記録、来信・投函、支出・収入など多岐にわたり、必ずしも私的なものばかりではない。翻って、百年前の上幌別での広範にわたる記録としての価値は、また別物であろう。

信太郎が遺した日記には、今となっては歴史の

狭間に消え去り、知るべしもないことごとが、時として貴石のごとく散りばめられて見えるのである。

■2月5日木曜日 晴 30度^{※華氏} 以下同じ (-1.1℃)

本朝三時より千代子産気付き、後藤マンを依頼する為女中に呼びに遣る。直ぐ来たりしも容

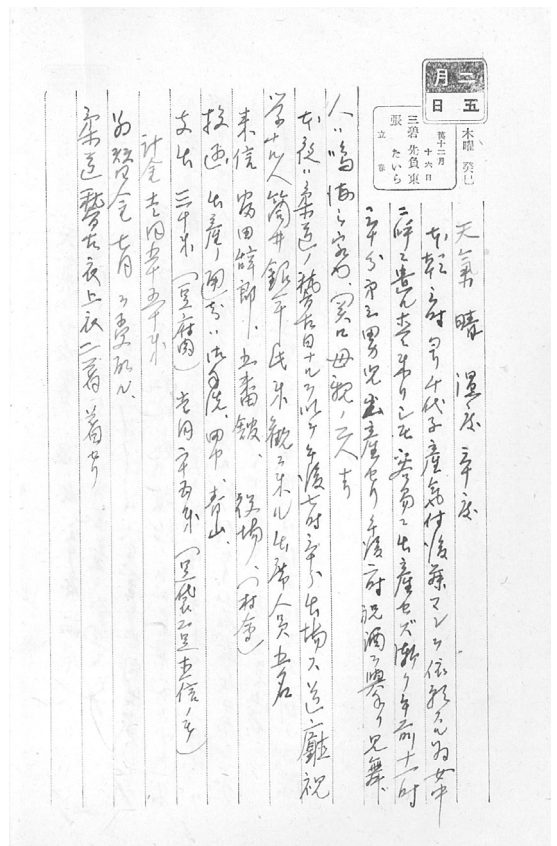


写真1. 深井信太郎日記（大正9年2月5日）

易に出産せず、漸く午前十一時三十分第三男児出産せり。午後二時祝酒を挙ぐ。見舞人は鳴海家内、関口母親の二人なり。

本夜は柔道の稽古日なるを以って午後七時三十分出場す。道庁視学なる人、筒井銀平氏来観に来る。出席人員五名。

来信 富田辞郎、五番館、役場(村会)

投函 出産の通知は御手洗、田中、青山。

支出 三十銭(豆腐)、一円二十五銭(足袋二足直信の為)、計金壹円五十五銭。

為替金七円を受取る。

柔道稽古衣上衣二着着手せり。

1. 千代産気づく、信太郎の居所、農場入場の経緯

前掲の写真は、大正9年(1920)2月5日の日記全文である(写真1.)。

日記は、朝3時に信太郎の妻千代が産気づくところから始まる。

前月、松も取れないうちに、自作農の妻が産後の肥立ち悪く命を落としたばかりである。医療の恩恵に浴することが薄い開拓地では、稀に起きることとはいいながら、翌月に出産を控える夫妻にとって他人事ではなかっただろう。

産婆と思われる後藤マンを呼びに女中を走らせるが、シバレ厳しい真冬の午前3時、街灯はおろか電気も無い時代のことである。旧暦を当たると12月16日で、雲が無ければ満月を過ぎた月が雪面を照らしていたものと思われる。

信太郎の住居は、新市街と呼ばれた今の南町、後に建立される忠魂碑に至る旧奉公橋の向かいにあった。(現在の、ふれあい公園東側駐車場向かい)

明治30年(1897)、秋田県書記官から福島県書記官となっていた^{ひがきなおすけ}檜垣直右によって拓かれた檜垣農場は、今の西町から桧垣町にあつて、たびたび水害に悩まされた。そのことを、2代目監理人として知悉していた信太郎は、不便を承知で現在地に住居を建て、昭和9年(1934)、枝幸村役場上幌別出張所が新築されるにあたって、後に歌登村役場、現在総合支所となっている用地を寄附

した。四半世紀をその地で暮らし、災害に対して安全な土地と確信できたからである。以後、百年にわたり新市街(東町、南町)に大きな水害の記録は無い。

信太郎が後に檜垣農場監理人に就いた理由について、富澤英氏の労作「草分けの群像」に「檜垣さんから、北海道に行って農場を開拓してくれないかと頼まれてその気になった」と記されている(富澤1997)。それには経緯があり、明治後年、檜垣・深井両家に遠戚関係が生じていたことが発端だ(後述)。

直右が朝鮮京畿道長官時代から退任後に房州(千葉県)に落ち着くまで、信太郎に宛てた手紙がかなり残されており、それを読み下すことができれば、そのあたりの事情も詳らかになるかもしれないが、残念なことに直右の筆が超難解のためそのままにしている。

何れにしても、遠戚の長である直右の知遇を受け、直接熱意の入った話を聞かせられたなら、若い頃、渡米を志したり、北海道開拓を夢想したこともある(富澤前掲)信太郎を動かすに充分だったと思われる。

そのような中で、信太郎による大正3年(1914)夏の農場視察調査が行われる。直右の依頼を受けてというより、その名代としての性格を色濃く残す調査だったと思われる。当時信太郎は、秋田県横手中学校で教職に就いており、夏季休暇の大半を利用した調査行は、直右への詳細な報告書として残されている。おそらく、視察調査を行う時点で次代の農場監理人は、兩人の中で既成事実だったのではないか。

翌4年4月、新妻と曹洞宗の若僧(中村岡定僧、翌年退出)を伴って上幌別に入り永住の地とした。

2. 大正時代の橋事情

深井家の出産にかかわった後藤マンの家がどこにあったか、今となっては知る術も限られるが、農場の小作であることが日記の記述から分かるので、今の西町から遠くても桧垣町あたりではなかったか。

使いに出された女中は、先ず大川(北見幌別

川)を渡らなくてはならない。

当時、無雪期の市街と新市街との行き来は渡船と言われていたが、関係住民が出役で掛ける簡易な橋があり見送橋みおくりばしと称した(現在の見送橋とは場所が異なる)。

当時の大量輸送機関は馬車馬橋で、これが通れないでは役に立たないため、それなりの規模、強度は持っていたと思われる。簡易な橋なれば、日常的な補修が欠かせず、大水が出れば流された。大川の唯一の橋が流されれば、再び渡船となり、馬車は水が引いたあと浅瀬べんけないを渡ったと思われる。粗末とはいえ、新市街や辺毛内方面の開拓はこの橋に大きく依存していた。

見送橋改修費用は村に請願したようだが、監督者と出役、資材調達などは地区の関係住民が担った。見送橋が永久橋となり歌登橋と改められるのは、昭和9年(1934)まで待たなくてはならない。

日記から、ペンケナイ川にも同様の橋が掛けられていたことが判っている。今のペンケナイ橋の前身であろう。栄橋という橋名も見えるが、現在同名の橋はなく場所は不明。この年は、橋にとっての受難の年であったらしく弥生橋は夏の暴風雨で、見送橋は秋の大雨で流されてしまう(後述)。十五線橋、更には橋の数を表すのか二十二橋という記述も見られる。

上流の橋については、春先の丸太流送の支障になるというので、開拓民と造材業者との間で確があったようだ。

以下、橋に関する大正9年の日記の抜書きを示す。

■3月7日日曜日 晴 40度(4.4℃) ペンケナイ川橋梁修繕の○○を見る為、高瀬、長谷川兩人を引き連れ○見す。

■3月9日火曜日 晴 西南風吹く 50度(10.0℃) 尚、見送橋を造材者の修繕に関し、部長区長より請願書を出すべき筈なり。

■5月6日木曜日 晴 無風 65度(18.3℃) 無風なるも温暖の為雪解け多く川水も増して橋梁の前後を越せり。

■5月8日土曜日 曇 60度(15.5℃) 部落の集会。栄橋は部落各戸より一人分出役に出る事。監督は石田、小川、浦田、児玉と決定。

■6月24日木曜日 雨 南風軟風 70度(21.1℃) 27日小学校の運動会当日マラソン競走ある為本年も体力を試さんと準備方々一日より弥生橋まで馳走し始む。(運動会当日のマラソン大会は、十五線橋折返し)

■7月1日木曜日 少雨 東北風軟風 60度(15.5℃) 栄橋の修繕に付準備資金は田中清次郎に渡さんとせし。百余円を使用することをせり。

■8月17日(火) 暴風雨 東軟風 70度(21.1℃) 昨夜来の暴風雨にて河川の水量増し本朝の六時頃に至りて堤防上に氾濫し徐々に畑地に入り正午に至りて大氾濫となり大激流となりて流る。弥生橋は流木角材の堆積にて水勢増して激しく遂に五〇落ち向側の橋詰は一〇許土塊墜落せり。

■9月5日(日) 雨 南風 疾風 70度 午前十二時三十分頃より川水氾濫。昨夜来の大雨にて先月十七日の出水より三寸多し。午前八時最高、午後五時全て〇通せり。高瀬與市郎来り橋梁墜落の前後〇〇を問う。西出寅吉も出會せり

■9月6日(月) 晴 南風 静穏 75度(23.9℃) 見送橋墜落に付高瀬は善後策を相談に来り。本日なりとも枝幸行をなすべく小川、児玉君に通知したり。午前九時頃小川、児玉両君来り。高瀬も来合せ枝幸行き〇〇決行すべきことになれ午後二時右三人にて出向せり。

■9月14日(火) 晴 南風 軟風 60度(15.5℃) 見送橋墜落の為、舟にては危険に付不便に付馬車の通りし得る橋を明後日より作ることに決定し、六線とペンケより人夫を出すことになれり

■12月25日土曜日 晴 静穏 35度(1.7℃) 木村重助へは二十二橋の材料壱百石の立木を分譲する為、午前9時オムロシベツ牧場に行く。九線の沢より八線の沢に至る間より搬出造材することに契約し壱百円を受取る。

3. 馬橈道と六線市街

話は真冬の上幌別に戻る。大正9年(1920)の冬に橋が残っていたかは不明だが、橋は無くとも川には厚く氷が張ったから、人馬の通行にも支障は無かった。くだんの女中も深夜の大川を渡り馬橈道を独り歩いたのだろう。

馬橈道とは、ソリ幅約50センチに曳き馬の足跡が付いたものである。人が歩くには、特に新雪の場合は橈跡は狭く、馬の足跡では歩幅が合わない。そして、ときとして馬の落とし物がぼた餅のごとく道の真ん中に鎮座する。もっとも、シバレ厳しい厳冬期であれば、ぼた餅は落とした先から凍り付いてしまう。

当時、除雪排雪はしていないから、馬橈道は踏み固められてだんだん嵩を増し高くなった。通りに面して建つ住居からは、雪穴をくぐるように道路に出、吹雪の後ともなれば、二階窓から出入りするもの珍しいことではなかった。雪解けが進むとぼた餅が顔を見せ、陽気に乾燥し馬車に挽かれて、馬糞風となって春の市街地を舞った。

さらに女中は、寝静まった六線市街を往く。

六線が市街地の様相を呈するのは、大正年代初頭である。「檜垣農場」と題して、現在の郵便局前あたりから、三叉路方面を写した写真が残っている。農場の中に枝幸市街に至る道(現在の道道12号線)が一本通っており、その両側に人家が立ち並び集落が広がっていったのだろう(写真2.)。

大正6年(1917)の歴史年表にその様子が記されている。「この頃より上幌別六線付近に市街地形成。戸数72戸、人口446人。遠隔集落戸数688戸、人口3,452人に達した」(富沢編1980)。



写真2. 上幌別市街地(大正2年)

この記録から、大正中期の歌登地域は、総戸数760戸、総人口3,898人であったことがわかる。

4. 父の^{じゅっかい}述懐とアイヌ集落

私の父、弘泰が、後年興味深い述懐をしている。「自分の子守りはアイヌのねえやだった」と。父が自分の記憶で言ったのか、誰かから聞かされたのかは、今となっては解らない。

当時、パンケナイ川と大川の出合い近くに、アイヌ集落があったことが知られている。この集落には、大正7年に農場主である檜垣直右も知人連れで足を延ばしている。六線市街の近くには、このアイヌ集落より記録がないから、ここの娘を子守りとして雇ったのだろう。

このようなことは、アイヌと和人の間に信頼関係が存在しなければ成り立たず、この地の両者の関係を表す、一つの証左とはならないだろうか。

確信はないが、このねえやとくだんの女中は別人と思われる。さすがに、アイヌ集落育ちの子守のねえやを、夜中の3時に使いに遣うような事はしなかっただろうから。

ただ、気になる記述を日記に見つけた。

■7月6日火曜日 大雨 東北風和風 60度 (15.5℃) 女中の家に祝い事ありて明日迄暇を与え又夕刻5時パンケ実家へ行く。

「女中の家→パンケ実家」、これがアイヌ集落を指しているのかはわからない。何も触れていないところを見れば、パンケナイは偶然の一致だろう。

5. 主暖房と燃料考察

産婆は、ほどなくやって来るが、なかなか赤ん坊は産まれない。

日記によるとこの日の天候は晴、気温華氏30度とあるから摂氏に直してマイナス1度、真冬の屋外の気温ではなさそうなので、玄関内かあるいは室内か。

新築して何年も経たないとはいえまともな断熱材とてない時代、室内が氷点下となることも珍しいことではなかった。暖かいのは火の傍らばかり

である。

では、当時の深井家の主暖房は何だったのか。
先ず着目したのは、よく日記にも登場する「薪」である。

開拓地という土地柄により、薪の原料は無尽蔵にあった。ある時は人を雇い、またある時には自ら汗を流して薪作りに精を出した。一夏にストックした薪はかなりの量に上ったと思われる。その経済性と燃料確保の容易さから薪ストーブが主暖房と考えるのが自然な流れであろう。

しかし、大正9年(1920)3月14日の日記に次のような記述を見つけた。「午前中より午後四時迄暖炉掃除」。遡って、1月13日には「暖炉墨(炭?)を買求め(小頓別から)運搬し来る」。ストーブとしないで、わざわざ「暖炉」と書くには、何らかの洗練なり先進性を感じるが、残念ながら暖房に関しこれ以上の記述はない。

当初はこの「暖炉墨」に惑わされ、専用燃料のみを燃焼させる「暖炉」を考えだが、安価な燃料の薪があるのに、高価と思われる「暖炉墨」の主暖房を採用するとはどうしても考えにくい。おそらく、暖炉墨は補助的な役割(着火材、^{おきずみ}熾炭など)で、主燃料は薪だったのではないか。推測である。

生活改善などの切り抜きを、後年になっても続けていた信太郎である。当時、寒地における最新暖房の性能なり構造、材質の情報は得ていたと思えるから、この暖炉も旭川の五番館あたりに注文したか、前年六線に開業したという鍛冶屋に図面を描いて作らせたか、詳細は不明である。

ただ、薪の利用分野は他にもある。

風呂である。当時は珍しかった内風呂があり、近隣で親しくしている家族は貰い風呂に来ていたと聞いていたのを思い出した。無類の風呂好きだった信太郎ゆえ、薪は毎日立てたと思われる風呂の燃料としても使われたことは確かだろう。

日記には、燃料系として炭や石油も出てくるが、炭は手あぶり程度の役にしか立たなかつただろうし、石油はランプを灯す灯油と思われる。

武骨な明治人だが、妻思いの信太郎のこととて、産室には火が入れられ暖かっただろう。

6. 出産と千代の出自

産気づいてから8時間半後の午前11時30分、ようやく第三男子が出生するのである。

母子共に健康とみえて、午後2時、おそらく同居していた母かめとともに、普段は飲まない祝い酒を傾けた信太郎であった。

そうこうする内に、出産の知らせを聞きつけた近隣の女たちが祝いにやって来る。千代が上幌別に来たのは、信太郎との婚姻が整った19歳の時である。聡明で容姿整い、少しも偉ぶるところがなかったというから、地区の人からは敬愛されていたと思われる。

千代の出自は福島県二本松の青山家で、維新前は二本松藩の重臣だったという。今でも二本松城の郭内に住居があり、いわゆるお嬢さんとして育った。女学校の先輩には、後に高村光太郎の妻となる長沼智恵子がいたというから、県内女子最高学府である福島高等女学校に学んだものと思われる。

信太郎との馴れ初めは、福島県安積^{あさか}中学で体育教師をしていた時の同僚に千代の父がいた縁によるという。青山家はよく「何処の馬の骨とも知れない」、外地であった北海道の辺境に赴くような男にお嬢さん育ちの娘を嫁がせたものである。しかも、その男の仕事が山口県出身官僚檜垣直右の農場監理人である。当時、福島県人、特に旧士族にとって長州閥に対する感情は推して知るべしで、その事からも信太郎はよくよく見込まれたものである。

千代は、明治29年(1896)生まれ、18年生まれの信太郎とは11歳ちがいである。

7. 「修養会」と視学来観

さて、上幌別に戻る。

信太郎は日記に記す。「本夜は柔道の稽古日なるを以って午後七時三十分出場す」

これを説明する為、1月25日と31日の日記を引用する。

■1月25日日曜日 少吹雪 北風 40度(4.4℃)

農場地内の青年、本夜七時より学校に集合、柔

道会を開催し青年に教授す。午後七時より同十一時迄講話及び稽古をなす。皆も熱心に稽古せり。明夜は六時より左のとおり決議せり。決議事項 委員五名。修養会と名ず。不足〇は委員にて協議すること。三十一日迄一週間〇〇右を連続すること。出席簿を作ること。

■1月31日土曜日 晴 30度 (-1.1°C)

青年会の修養会柔道は本日を以って一週間の稽古を終りたるを以って〇〇の二十五日の発会式の茶話を開き、会の要点、規約を作り十時閉会せり。飯尾、高瀬、鳴海、佐藤與一、高橋、長谷川清、堀の七名、余は初ありて終もある様訓示せり。毎月五、十の日として稽古日となすことを約せり。

学校体育場を稽古場として12枚の畳を持ち込み、農場地内の青年に柔道を教えることとなった信太郎だったが、先ず一週間連続で稽古を続けた青年たちは意気軒昂で、毎月五、十の日を稽古日として継続することになった。この「修養会」初日が2月5日であった。信太郎としたら、子が生まれたからと言って休む訳にもいかなかっただろう。

「道庁視学なる人、筒井銀平氏来観に来る。出席人員五名」

その初日に来観者があった。

道庁視学の筒井銀平氏である。視学という職は、「旧制度の地方教育行政官。市視学・郡視学・府県視学があり、学事の視察および教育指導に当たった」(大辞泉)とあり、教育行政の中でもかなりの高官である。

試みに、ネットで同氏を検索すると、札幌師範学校関連で数件のヒットがある。明治26年(1893)に開催された北海道師範学校同窓会においては、筒井氏が在校生代表として祝辞を述べている。若き日は、大秀才だったのだろう。大正3年(1914)発行の「北海之教育」に「南満州の小学校教育に就いて モンテッソリー女史の教育法について」と題して寄稿しており、長じて本道教育行政の中樞に昇ったと考えられる。

その高官が、なぜ開拓間もない上幌別の辺地に

やって来たのか。しかも、これといった実績も無い、始まったばかりの柔道稽古会である。

農場主、檜垣直右が、かつて文部省視学官に任じられていたことを知らない信太郎でもあるまいに、日記には視学来観に関して何も記していない。

ただ「修養会」は、この地方の学校開放、社会教育の嚆矢だったことは間違いない。

8. 講道館式稽古と信太郎の出自

幌別尋常小学校(歌登小学校の前身。上幌別にあったが幌別と称した)の体育場に戻る。

出席者は5名、暖房など無く、数灯のランプが頼りの、おそらく柔道着も満足に揃っていない中での稽古である。

信太郎は前述のとおり明治18年(1885)、旧くは日光街道の宿場町であった埼玉県北葛飾郡杉戸に生まれた。粕壁(現、春日部)中学校を卒業すると、東京に出て講道館の門を叩き、「四天王」横山作次郎の指導を受けた。兄弟子には空気投げで名を馳せた三船久蔵(後の十段)がいて、稽古に没頭したという。経済的理由で講道館を離れることとなった時、インドのボンベイ(現在のムンバイ)に体育教師の仕事があるというので、横山と連れ立って嘉納治五郎(講道館創始者、近代柔道の父)を訪れた。「兵式体操はどうか?」、「普通体操は?」これらは、英語で質問されたという(富沢 前掲)。英会話ができれば苦勞するという「親心」を察した信太郎は、治五郎の元を辞去する。結局、福島県安積中学校に体育教師として紹介したのは、横山作次郎である。

若い日に、講道館で鍛えた信太郎の柔道は本式であつたらう。畳敷とはいえ、厳寒2月の体育場に素足、もろ肌に稽古着一枚での稽古は9時までの2時間の決まりだったが、熱が入り9時半、10時に及ぶこともあった。

小学校の位置は現在地と変わっていないが、学校が建った当初は農場の中の一軒屋だったと思われる。市街地にほど近く広い用地は、農場の一部を檜垣家が寄附したものである。通ってくるのは農場小作の青年達だから、学校は距離的にも格好の稽古場だった。体育場を稽古場とする修養会柔

道は、市街地にできた青年会も巻き込んで、この後ますます熱を帯び盛んになって行くのである。

9. その他の事

第三男児出生を、御手洗(みたらい)(九州小倉、双子の妹マツ)、田中(東京、双子の妹ウメ)、青山(福島県二本松、千代の実家)に知らせる手紙を投函し、信太郎の長い一日が終わった。

ちなみに、御手洗家は農場主、檜垣直右の妻マキの山口県萩の実家で、マキの縁者鉉一に信太郎の妹マツ(満の変体仮名に、つ)が嫁いだことから檜垣家との遠戚関係が生まれたものである。

この縁がなければ、信太郎が檜垣農場監理人となることも無かっただろう。

日記「来信」に、「富田辞郎」の名前が見える。当時の枝幸郵便局長富田迪の次男で、この年、檜垣直右の四女房子と婚姻の運びとなる。仲介したのは、枝幸尋常小学校長、業天音五郎^{ぎょうてんおとごろう}である。音五郎は、直右が愛媛師範学校長に就いていたときの恩師・教え子の関係にあり、信太郎とも肝胆相照らす仲であった。

当時すでに信太郎の独立(実現は11年)話が出ていたようで、直右には次の農場監理人という思惑があったものと思われる。というのも、房子は既に農場経営のかなりの部分まで携わっており、適任と考えられた。

これには後日談があり、富田は農場監理人を2年余り務めた後、札幌の北海道拓殖銀行に就職してしまうのである。

余談を重ねるが、房子のすぐ下の妹、五女の秋子は島根県太田市の篤農家を祖先に持つ岩谷謙三に嫁ぎ一子を設けた。これが、作詞家、翻訳家、越路吹雪のマネージャーとしても知られる岩谷時子である。

貿易会社に勤めていた謙三夫婦は、時子出生時に朝鮮の京城府(現、ソウル特別市)に在住していた。

祖父、檜垣直右も初代京畿道長官として京城におり、たまたま時子出生の日が退官日と重なった

という逸話がある。

信太郎の備忘録に岩谷謙三の所書が残っており、親交があったことは確かなので、幼少時の時子を見知っていたかも知れない。

直右は退官後、大正7年(1918)、そしてこの年と立て続けにこの地を訪れ農場を視察している。全ての公務を退き、壮年時に志した農場の行く末がよほど気がかりだったのだろう。

この日の日記の最後は、「柔道稽古上衣二着着手せり」。これは臨月の千代ではなく、母、かめの仕事だったと思われる。農場青年の稽古用だろう。

10. 大正9年日記抄

この年の日記から、興味深い部分を抽出し簡単な注釈を加えてみた。

■1月1日木曜日 雪 30度(-1.1℃) 西風

新年を迎え家族一同祝杯を挙げ、吉例の雑煮餅を味わう。午前十時学校へ村賀式挙行に参列の為赴く。正午村賀式挙行、会費五十銭にて祝杯を挙ぐ。参列人員十五名、式後小室にて新年招待会を催す。小川七五三吉、長谷川文太郎、同助太郎、竹杉伊吉、中野亨平、堀慶蔵、藤木音吉、高瀬與市郎、本吉嘉平次、浅水己之松、西本寅吉、関口清、谷口庄次郎、三木馬太郎、飯尾平吉、佐土半七、脇安治、午後五時全て解散せり。

元旦は、地区の有志(実名列挙。中野、堀は教員)が学校に相集い上幌別独自の村賀式を挙行していたようだ。式後は、新年招待会という名の宴会で、これも恒例だろう。

■1月5日月曜日 曇 30度(-1.1℃)

馬橿は小頓別方面へ本日より頻繁通行し始めた。

正月5日、小頓別方面、すなわち鐵路と繋がる馬橿の定期または、不定期便があったことを裏

付ける記述。おそらく枝幸からの通し便もあり、無雪期には馬車が通っていたのだろう。もっとも、郵便局が存在したということは通送があり、その請負車輛が定期便となっていたとも考えられる。

■2月8日日曜日 少雪 37度 (2.8℃)

一昨日の吹雪の為道路未だ開通するに至らず、依って枝幸行きを中止せり。午前八時三十分玄関先の他窓下等の除雪をなし暖炉を掃除し、午後書類の整理をなす。

小林支店員清水喜七君妻君出産せりとて湯たんぽを借用に来る。

弘泰誕生の後、吹雪で三日間交通途絶し、用務のための枝幸行も取り止めている。その三日後の2月8日、小林支店清水喜七に待望の男児(後の丸正清水商店主信吉氏、平成27年没)が出生した。雑貨店での出産で、湯たんぽを借りに来るというのも微笑ましい。大正9年の2月、吹雪を挟んで生まれた二人は生涯の友となるのである。

■2月22日日曜日 晴 20度 (-6.7℃)

村医招聘の件、拓殖医と村医の何れか六線に置くことに村長は熟議し直ちに支庁へ問合せ交渉し纏らざる中は村医を置くべきことに約束せしを部落有志に話し置けり

戸数七百数十、人口約四千の地区ともなれば、自ずと医師の常駐を望む声の高まりはあっただろう。村長との直談判は、この夏、開拓医栗城定蔵氏の上幌別医院開業という形で結実する。

■3月6日土曜日 吹雪 35度 (1.7℃)

藤野旅館を午後十二時三十分出発、朝倉写真館にて中形写真を取り帰途に就く。ウエンナイに於いて脇安次の馬櫓に乗り帰宅す。午後五時二十分なりき。(五十銭、キンコマナイ茶店)

2月末、枝幸に出た信太郎は、用務を終えた足で朝倉写真館に赴き冬装束を着けて写真を撮る。この時に撮った写真が残っている。内地に暮らす

知友人にでも送ったのだろう(写真3.)。

この日の信太郎はついていた。帰り道、知人の馬櫓に便乗しキンコマナイにあったという茶店で休憩をとり、夕飯時には上幌別に帰り着けたのであった。

■3月23日火曜日 雪 50度 (10.0℃)

幌別尋常小学校の卒業式は午前十一時挙行、部落有志小川、高瀬及び二三の父兄、青年十数名参列し学芸会及び撃剣の試合(五六年の男子)をなし、最後に中野、堀両教員の慰労会をなし午後六時三十分退校せり。

当時の卒業式は、学芸会や撃剣試合など盛りだくさんだったようだ。その後は、理由を付けての宴会でこれも恒例。

■4月5日月曜日 晴 西南風 55度 (12.8℃)

枝幸村分会へ上幌別軍人会。基本金及び其の保管方、下士兵卒の既来の人員、官憲青年会との



写真3. 冬装束の深井信太郎

連絡、軍人会の状況事業の照会に関し本日答申せり。渡辺仙峯氏の点呼参会許可届を差出せり。旭川支部報を、大沢、北谷、長屋の諸氏へ配布せり。

年表によれば、上幌別在郷軍人会は大正 11 年分会設立とされていたが、この時点で存在していたようだ。予備役（軍隊経験者で有事や訓練時のみ軍籍に復する）によって構成され、勅語、勅諭の奉読式、四大節における遙拝式の他、召集幫助、入営前教育など幅広い後方支援活動を行なった。

■5月10日月曜日 晴 60度 (15.5℃) 北東風寒し

花豆、豌豆の蒔付、茄子苗床作り下殖す。

馬糞運搬は佐藤興一を依頼し午前八時より午後四時三十分迄、馬車に十台運べり。

上記の他、5～6月に作付けした品種。（上川農業試験場依頼分含む）

玉葱、牛蒡、人参、燕麦、菜種、大根、体菜、赤大根、みつ葉、小豆、大豆（3種）、玉蜀黍、小麦、馬鈴薯（メークイン、ウォンダーの二種）、夏葱、丸美麦、金時、南瓜、甘藍（カンラン＝キャベツ）、十六ササギ、胡瓜（キュウリ）、陸稲（畑に植える稲）

5月になれば畑も乾き、遅霜の心配もほぼ無くなる。信太郎の畑でも作付けが始まったようだ。農場の畑では、主に換金作物の馬鈴薯、青大豆、小麦などが作られたと思われる。この他、上川農業試験場から委託された試験圃場もあって、なかなか忙しそうだ。

元来、信太郎に農業経験は無かった。それでも農場監理人・農民指導者となり得たのは、偏にその人脈、情報網によったと思われる。宇都宮仙太郎・黒澤西蔵（雪印乳業創始者）、林昇蔵（札幌で酪農経営。バター製造）、佐藤昌介（北海道帝國大学初代総長）といった先達ともそうして知り合った。購買組合、農協組織など逸早くこの地で実践できたのも、情報網を活かし先進事例から学んだからと思われる。

ちなみに、作付け品種の中のメークインが北海道に導入されたのは大正 6（1917）～7年と言われているから、いかに実践が早かったかが分かる。

■6月11日金曜日 晴 午前東風午後南風 68度 (20.0℃)

小竹彦太郎へパン種 1円 50 銭を小包にて送り貰うことに〇〇支払い依頼せり（依頼品は 14 日受取）

■6月12日土曜日 半晴 東風 55度 (12.8℃)

枝幸藤野旅館出発午後 2 時。途中、瀬川と云う牛乳屋に寄り牛乳を飲み、キンコマナイに〇〇にて中野君と一盃。午後 7 時 30 分自宅着。

用務で枝幸に出た信太郎は、商店にパン種の郵送を依頼している。翌日は、帰りがけに「瀬川という牛乳屋」で牛乳を飲んでいる。一見何事もない記述に思えるが、大正期にパンを焼いていたらしいのも驚きだし、これまでは、この地（枝幸村）に初めての乳牛エアシャー 1 頭が信太郎により導入されたのが大正末年となっていたから（富沢編 前掲）、一気に 5 年ほど早まることとなる。しかも、自身の記述でこれまでの定説を覆したことになる。想像するに、こうした経験を重ねて乳牛の有用性を認め、自己導入に至ったと思われる。「パンと牛乳」大正期の食卓としては、たいそうモダンではないか。

■6月15日火曜日 晴 南風 75度 (23.9℃)

札幌祭りにて例年の通り全道民休業挙祝す。部落の集会は午後 3 時より学校運動会の件相談、及び小頓別道路修寄附金、枝幸巖島神社移転設立に付建築寄附の件。

札幌祭り（北海道神宮例大祭）の日は、全道的な休業日。後にこの日、上幌別は招魂祭となる。

六線市街地区の集会有ったようだ。議題は 3 件、27 日開催の学校運動会の件、及び小頓別道路修繕寄附金、枝幸巖島神社移転設立に付建築寄附の件。当時、物事を進めようとするとその多く

が寄附金を伴った。地区役員は多くの時間を寄附金集めに費やした。もっとも、寄附を負担できる者は限られていたと思われる。

■6月17日木曜日 晴 南風和風 75度 (26.7℃)

青年会の柔道会を開催し本夜より1週間開くことに為せり。農場青年全部集合盛んに稽古せんと意気込みり。

19日 青年の柔道会に出席18名なりき、9時30分終了。講道館投げの形を教ゆ。

農場青年の柔道稽古は、ますます盛んなようだ。信太郎も「講道館投げ」の形（ホームページによると講道館には5種15の投げ技の形がある）を教授してそれに応えた。

■6月19日土曜日晴 午前南風午後東風 80度 (26.7℃)

枝幸小頓別間鉄道期成同盟会の八島義八君立寄り調印を取るとの事にて明後夜六線宿泊なりと。午後6時頃なりき。今明日中に上、中部落の賛成を得んと。

この頃から、枝幸・小頓別間の鉄道敷設運動があったことが判る。

ちなみに、日記にある「上部落」は本幌別、「中部落」は幌別中央のことである。

■6月21日月曜日 晴 東風軟風 75度 (23.9℃)

田村日本製麻会社員来訪し亜麻敷丸太百本、倉庫屋根修繕を依頼せられ二、三日中に決定し置くことにせり。

禿全梁東寺僧侶、本日亡父の命日にて読経にて来る。又同氏妻君も遺物を持参し顔出しに来る。

第一次世界大戦景気を背景に、5年から亜麻栽培が始まり、六線には集積のため日本製麻、帝国製麻2社の倉庫が相次いで建設された。福引きを用意して勧誘するなど2社の作付け競争は熾

烈だった。

東寺（順信寺）の福江住職が諸事あって転任したため、新住職に禿全梁が就任した。

■6月27日日曜日 晴 南風軟風 85度 (29.4℃)

今日は、小学校、青年団、軍人団の総合運動会。午前9時開始、午後6時30分終了。

マラソン競走は、十五線橋迄。余は八〇橋迄。柔道投げの形を本日試行せり。

夜に入りて教員諸君の慰労会挙行。午後7時より午後10時迄。

小学校の運動会というより、地区挙げての一大行事だったのだろう。マラソン競走あり、柔道のデモンストレーションありで、盛況な様子が伝わってくる。午前9時に始まった運動会であったが競技を終えたのが午後6時30分、教員諸君の慰労会という名の宴会が終わったのは、午後10時である。

■7月10日土曜日 晴 南風 75度 (23.9℃)

午前10時氏神八幡神社に参拝、氏子総代は一人も見えず。正午頃部長代理となり祝辞を挙げて御酒を戴く。余興として角力、夜は青年の芝居あり。浪花節入なし。

八幡神社の祭礼日は、明治30年7月10日の檜垣農場貸付認可日を記念して定められた。この年は、氏子総代が多忙だったと見え、信太郎が部長代理となって諸事を進めたようだ。

■8月8日(日) 曇 東風 軟風 七十五度 (23.9℃)

檜垣氏より電報ありて午前十時出迎えの為出発し午後四時小頓別着、五時出発。檜垣氏老婦、孫二人を連れて帰る。出迎人、谷口、脇、高瀬の三人、途中に於て檜垣氏に出会う。檜垣氏は農場着午後八時。小作人農場地内の者全部出迎う。午前二時就寝す

農場主檜垣直右は、明治30年(1897)、42年(1909)、大正7年(1918)、そしてこの年と、都合4回この地に足を運んだことがわかっているが、夫人や子供連れは初めてである。孫の元吉(後の九州大学教授、歴史学)と守津満子である。農場が軌道に乗り民生も安定したと直右が考えたからだろう。また、二親を亡くした小さい孫二人を置いていけなかったとも伝わる。

■8月14日(土) 曇 南風 疾風 八十度 (26.7℃)

農場小作人表彰式(二十四年)並に祝賀会は午後四時より挙行。銀盃一個祝儀を与へ表彰せしめるもの八名。谷口、後藤、脇、長谷川文、高瀬、長谷川助、野尻、今川。部長、小学校、富田の祝辞。表彰者小作人の祝辞及答辞あり。式後祝賀会あり。教員、僧侶、郵便局長、森林主事、拓殖医者、先住者(大友、君が袋)、農場市街地の者一般、区長、部落有志、小川、児玉、石田、須賀本氏等、元小作者十年以上の者を招待す。村長、業天氏は不参なり。午後九時閉会せり

剣道、柔道の青年、少年、児童の余興あり。式後記念撮影をなす

拓殖医は午後六時頃到着赴任せり

農場主夫妻の来臨を得て、農場小作人の表彰式及び祝賀会が挙行された。今般の就農24年は、即ち農場開場以来の勤続者8名が表彰対象である。式後、記念撮影したようだが残念ながら残っていない。

■8月17日(火) 暴風雨 東軟風 七十度 (21.1℃)

昨夜来の暴風雨にて河川の水量増し今朝の六時頃に至りて堤防上に氾濫し徐々に畑地に入り正午に至りて大氾濫となり大激流となりて流る。六線市街にては三叉路点浅水氏前の道路高点に達せんとせり。関口、小林支店は床上等の所迄達せんと。医者家族は川向鹿野料理屋へ避難せんと困難狼狽せしと。大正七年の洪水より一

尺少し。弥生橋は流木角材の堆積にて水勢増して激しく遂に五〇落ち向側の橋詰は一〇許土塊墜落せり。宮下、藤木の流漕人夫に〇して防禦せしむ。水は午後六時頃退けり

折からの暴風雨で三叉路辺りに水が溜まり、小林支店では床上浸水の被害が出た。赴任間もない医師の家族は、比較的安全な川向(鹿野料理屋。後の「港や」か。現、稚内信用金庫歌登支店付近)に避難してしまう。そうこうする内に弥生橋落下の報がもたらされる。農場主一行も被害拡大を懸念し、翌日帰途に着くのである。

■8月25日(水) 晴 東風 疾風 七十度 (21.1℃)

石川団体の西沢外一人オムロシュベツ檜垣牧場の中より金鉱を発見したりとて、今後種々御相談を〇て着手せんとすると思し来れり

突然降って湧いた、金鉱発見の報。この話は歌登町史執筆者の富澤英氏からも聞いたことがあるが、竜頭蛇尾で終わったところをみると、誤報とまでは言わないまでも鉱業的な採掘までは至らなかったようだ。発見の経緯、発見者の鉱脈に関する知識や経験も不明のまま、日記の記述はこれきりで終る。なお、この時の試掘跡が旧焼却炉跡近くに残っているそうである。

■9月4日(土) 大雨 北風疾風 七十五度 (23.9℃)

国勢調査民間に宣伝の為藤田一課長と村助役来る。学校にて午後八時より九時三十分迄集りし者六十名位。俣野第一郎には指導の為に出張今晚宿泊せり

第1回の国勢調査が、いかに末端まで国の威信が掛かっていたか解るエピソード。村は、助役と担当課長、さらに担当者は泊まり掛けで説明宣伝活動を行なった。これでは調査員としても奮起せざるを得ない(後述)。

■9月5日(日) 雨 南風 疾風 七十度 (21.1°C)

午前十二時三十分頃より川水氾濫。昨夜来の大雨にて先月十七日の出水より三寸多し。午前八時最高、午後五時全て○通せり。高瀬與市郎来り橋梁墜落の前後○○を問う。西出寅吉も出合せり。

■9月6日(月) 晴 南風 静穏 七十五度 (23.9°C)

見送橋墜落に付高瀬は善後策を相談に来り。本日なりとも枝幸行をなすべく小川、児玉君に通知したり。午前九時頃小川、児玉両君来り。高瀬も来合せ枝幸行き○○決行すべきことになれ午後二時右三人にて出向せり。

■9月7日(火) 晴 南風 七十度 (21.1°C)

見送橋墜落の為枝幸村長と相談の為出向たる小川、高瀬、児玉の三名本夜帰着。宮崎喜一郎村長引受架橋の準備をなすべしと快諾せり。

■9月14日(火) 晴 南風 軟風 六十度 (15.5°C)

見送橋墜落の為、舟にては危険に付不便に付馬車の通りし得る橋を明後日より作ることに決定し、六線とペンケより人夫を出すことになれり。

大正9年(1920)は橋にとっての大厄年だった。夏の弥生橋に続けて、秋の大雨で見送橋まで流されてしまう。一致団結して村役場に村長を訪ねるが、上幌別にとって最重要の橋である認識は一致していると見え、村長も即時予算措置を快諾したようである。予算措置したと言っても、資材や出役は上幌別任せである。この時は、一番恩恵を被っている六線とペンケナイ方面からの出役で決定した。

このような施工を繰り返すことで、技術の蓄積が進み資機材調達なども専門化、分業化して行ったのではないか。

■10月5日火曜日 雨 東風 軟風 55度 (12.8°C)

国勢調査報告は今朝10時整理し書留小包にて投函せり。先月15～6日頃より此が下準備に

着手し本日までの努力漸く結末を遂げ報告するを得たり。

前述のとおり、大正9年は第1回目の国勢調査年である。信太郎も調査員として各戸回りをし、本日漸く報告の運びとなった。10月1日の日記には、「開闢以来の事業の一端を完成役目を果せり」とあり、痔疾で体調勝れぬ中での調査完遂の喜びは一人^{ひとしお}であった。本調査による我が国の総人口は55,963,053人、枝幸村は8,067人であった。調査員に配られた徽章が今も残っている。

■10月13日水曜日 晴 静穏 55度 (12.8°C)

本日午前11時枝幸より高等科生徒遠足に来たり。枝幸に関係ある北見屋、丸正、森永と菓子、ブドー、南瓜他を与えて歓迎せり。午後1時出発せり。

枝幸尋常小学校高等科生徒が遠足で上幌別を訪れた。枝幸関係者が世話を焼き、滞在2時間で再び枝幸に向かったようだ。往復40キロ弱、遠足というより強歩か。

■10月24日日曜日 雪 西風 疾風 45度 (7.2°C)

昨夜初雪、本朝一寸ばかりの雪を見る。一日散り散りて降る。

大正9年の初雪は、10月23日。上幌別に長い冬がやって来た。

■11月14日日曜日 曇 西風 強し 50度 (10.0°C)

入営兵は上部落に於いては上田三蔵、瀬川仙太、ポールンベツにて平内金太郎、上ケトベツは後藤陸弥、中野清一なり。本日、大沢松次郎、松原信吉、安田力次へ右入営兵に対し祝辞を送付、代読を依頼せり。

当時は徴兵制度が生きている時代、入営にあたっては壮行会が集落毎に開催され、在郷軍人会

で祝辞を贈る慣わしがあったようだ。

■12月2日木曜日 快晴 静穏 50度(10.0℃)

昨夜寒冷、厳しく凍る。

高瀬信次、東京近衛兵竹橋聯隊に入営の為出発せり。一同見送る。

上幌別から近衛兵が選ばれた。近衛兵は、皇居ひいては天皇を守るという任務も担っていたため、選ばれること自体名誉なこととされていた。この年誕生した三男弘泰が近衛兵として出征する事となるとは、信太郎は知る由もない。

■12月22日水曜日 吹雪 西風 30度(-1.1℃)

大正9年度の農場の決算終りたり。

■12月30日木曜日 半晴 西風 30度(-1.1℃)

門松採りはオムロシベツ新牧場。

農場主報告のため、最初の頃は3月まで掛かっていた農場決算が、年前に終わるようになった。書式、様式など信太郎なりの工夫の成果だろう。この年の決算で、気になる点の一つ。「農場の決算終りたり」。農場となっている。それは30日の日記に、「オムロシベツ新牧場」として表れている。牧場というからには、何らかの家畜を飼育していたと思われるが詳細な記述はない。

ヒントは5月10日の日記にあった。「馬糞運搬は佐藤與一を依頼し午前八時より午後四時三十分迄、馬車に十台運べり」。この日、信太郎の畑に馬糞10台運んでいるが、この時期どこの畑も元肥として馬糞は欲しい。一日がかりで運ぶこれだけの量が自由になるには、相当数の馬を飼育しなければ確保できない。新牧場は、馬牧場だったのではないか。

門松は新牧場で眺えて、新珠の年と新牧場ともに幸あれかしと祈りを込めた、大正9年の年の暮れだった。

あとがき

さて、祖父の日記、父の産まれた日という極め付きのプライベートを、歴史をイメージするとい

う手法でどれだけ普遍化し百年前の上幌別の一日を再現できただろうか。

日記に登場する人物はほとんどが物故者とはいえ、その子孫・親族の多くは今もこの地で生活されている。綴られているのはきれい事ばかりではないので、どうしても取舍選択が必要となる。日記の性格上そのままの姿での公表ができないとすれば、こういった手法も許されるのではないかと考えた所以である。

一方、引用における人名は、前後を判断し全て実名で通した。歴史的事実に近づけようとするれば、実名は欠かせないとは言わないまでも大切な要素と考えたからである。

最後に付け足した「大正9年日記抄」は、日記の中から興味深い記述を抽出し、簡単な注釈を加えた。町史や歴史年表に書かれていることもあれば、新しい事実も、これまでの定説を覆す記述もある。

引用した日記は2月5日以外は全て抄、その一部である。判読できない文字は「○」で表した。読み下す作業の中で、誤読や誤ったイメージによる展開があるやも知れない。識者の指摘を待つ。

謝辞

本稿をまとめるにあたり、檜垣まり氏、守津早苗氏のお二方には、資料収集から原稿の校正まで、多大なるご支援を賜った。明記して感謝申し上げる次第である。

参考文献

富沢英編、1980；歌登町史。歌登町。

富沢英、1997；歌登町史副本草分けの群像。歌登町。